

(二〇一三年度)

7 国 語 問 題 (六〇分)

(この問題冊子は21ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破つたりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

精神科の病気で「離人症」と呼ばれる症状がある。この症状の特徴は、自分の内部にも外部にも生きいきとした現実が感じられなくなつて、なにもかもが色褪せたコピーのように見えてくるという点にある。いろいろな物体がそこにあつて、それがなのであるのだが、頭ではわかつているのに、それが本当にそこにあるという実感が伴わない、それがそこにあるということが、ここで感じられない。音楽を聞いても、いろいろな音は聞こえてはくるけれども、それがここに響かないから、まったく音楽としての感動は出てこない。絵を見ても、そこに何が描かれているかは理解できるけれども、全体の意味も分からないし、美しいとも思えない。景色を見てもなんの感興もわかず、絵葉書を見ているのと一緒だと患者は言う。¹意識はあつても、こころのない状態だと言つてもよいだろう。

少し内省力のある離人症患者だと、「自分」というものが失われてしまったという言い方をする。自分のことを考える瞬間ごとに、いまの自分が自分であるということは分かるけれども、いまの自分とさっきの自分とがこころの中でつながらないから、本当の自分としてまともらないのだと言う。ずっと自分のことを考え続けていると、次から次へと「自分の層」が積み重なつて行くだけで、以前の自分はだんだん下積みになつて見えなくなり、自分とははたしてどんなものだったのか、まったく捉えられなくなるのだと言う。

そういつた内省力のある患者の場合、時間はどうなつているのかと尋ねてみると、時計を見ればいま何時分だということはあるし、カレンダーを見れば今日が何日かはわかるけれど、そこに時間というものが流れているという感じがまったくしないのだと言う。今、今、今、今という不連続の点線のようなものはあるのだけれども、今と今とのあいだに時間が流れないから、「いま」という実感にならないのだとも言ふ。

離人症患者のこういつた言葉を聞いていると、「自分」というものと存在の「実感」というものと、そして「時間の流れ」というものとは、人間のこころにとって結局は同じことを指しているのに違いないという気がしてくる。そして、ここでいう「時間

の流れ」とは、時計やカレンダーで読み取る時間とは何の関係もないものだし、意識の中での今という点の不連続な継起ともまったく別の次元のものであるに違いないということもわかってくる。時間を空間内の物体の位置の移動で考える物理学の時間概念も、時間を意識内での継起で考える心理学や哲学の時間概念も、実感としての、あるいは自分自身の存在と密着した生命的感覚としての時間感覚とは非常にほど遠いものなのである。

現在のわたしたちがなじんでいる「科学」は、西洋古代の文明に源を発している。西洋古代の文明とは、エイドス(形相)をイデア(本質)と見なした文明である。形のあるもの、目や耳でもって、つまりは意識にとつて「それが何であるか」を識別しうるものだけが、何千年の昔から人間の知の対象とされ、そういった物象や形像についてのみ「科学的思考」が試みられてきた。しかし、はたしてそれでよかつたのだろうか。わたしたちのところが本当に感じ取っているのは、はたしてそのような形のあるものだけなのだろうか。形のないもの、目や耳では捉えられないもの、それでいて私たちが生きているという現実そのものから絶対に切り離せないもの、そういったものを根本的に忘れたところから、わたしたちの「科学」が生み出され、この忘却は二十世紀末の現在、ますますはつきりとその正体を現してきているとは言えないだろうか。二十一世紀に、もしいままでとはまったく別の、新しい知の次元が模索されるとするならば、それは間違いなくこの「形のないもの」についての知の次元であろう。そしてわたしたちにとつての「生きた時間」とは、疑いもなく、この「形のないもの」に属しているのだから。

現代でも、西洋文明や科学に汚されていない地域では、このような形のない時間⁵がまだ生き続けているらしい。ケニアのカムバ族出身の宗教学者ムビティによると、アフリカ原住民にとつて存在する時間様態は、スワヒリ語でいうと「ササ」と「ザマニ」の二種類だけだという。「ササ」は、生きいきとした現在の持続の中で捉えられた事柄に与えられている時間様態であり、「ザマニ」は「無窮の過去」あるいは「あらゆるものを溶かし吸収する大洋、万物の貯蔵庫」で、時間の一領域というよりは、むしろ恒久的な実体的存在の領域とみなすべきものである。たとえば死者は、肉親や友人に記憶されているかぎり「ササ」とどまることが、知己の最後の一人が死んだときには「ザマニ」に入って完全な死者になる。(J・S・ムビティ『アフリカの宗教と哲学』大森元吉訳)。

このように、「ササ」を「ササ」たらしめている「ササ性」、つまりわたしたちのここらとつての「生きいきとした現在」の時間を可能にしているのは、これに関係する個々の個人が生きていて、それに関与しているという事実である。生きた関与者がいなくなれば、「ササ」も「ササ」ではなくなる。つまりはそこに時間が流れなくなつて、永遠の「ザマニ」が開ける。しかし、そこでなお生きている人たちは、彼ら自身にとつての「ササ」を生き続けている。先に述べた離人症の状態では、患者の意識は科学のいう時間の中にとどまっているのに、患者のこころは「ササ」から隔絶されている。患者は生きながらにして現実への関与を停止しているのである。

わたしたちは、時間が一定の不可逆の方向に進行していると思つている。これを時間が未来の方向に向かつて進むと感じる人も、過去へと向かつて流れると感じる人もあるだろう。いずれにしても、時間は「まだない」から「ある」を通つて「もうない」への方向で、あるいは逆に「これまで」から「いま」を経由して「これから」への方向に動いている。しかし、未来にしても過去にしても、すべてわたしたちが生きている現在における「ある」から見られた「まだない」であり「もうない」なのであつて、そこには必ず生きた「わたし」が立ち会つている。物理学は、時間のこの不可逆性を説明しようとして「ビッグバン」という壮麗なドラマを考えたが、奇妙なことに時間のそもそもその始源であるはずのこの大爆発を考えると、そこには必ず仮想上の「わたし」が、見物人として立ち会つている。だれ一人として人間の立ち会わないような出来事を、ひとは構想することができないのである。終末論的な「この世の終わり」にしても同じことだろう。人類がすべて死に絶えて、生命の一片も残っていない状態での時間の消滅を考へることはできるだろう。しかし、そこにもやはり、不思議なことに仮想上の「わたし」という見物人だけは生き残つてそれを見ている。「わたし」の立ち会っていないような「時間の死」を、だれが想像することができるか。

(木村敏「形なきものの形」)

問一 傍線部1「意識はあっても、こころのない状態」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a どのような感動や感興といった経験をしても、後で色褪せた経験にしてしまう意識の状態である。
- b およそ知るとか理解するとかいった精神的活動自体がまとまりを欠いていて自己を失っている。
- c 意識では何であるかを認識できても、その認識はひたすら感覚知覚のみに依存した経験で終わっている。
- d 知るとか理解するとかなどの精神的な営みはあるが、生きいきとした現実の感触が欠けている。

問二 傍線部2「自分の層」が積み重なって行くことあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 以前の自分と今の自分とが不連続であるから、今の自分にとって、以前の自分は価値がないので棄ててしまう。
- b 常に現在時点での自覚意識はあるものの、それらは断片的なまま堆積し、自分とは何かを捉えられなくなっている。
- c 以前の自分と今の自分とがつながらないとしても、それらは堆積することで不連続な自分を作り上げている。
- d 自分のことをその都度考えるのみであって、その結果は無価値な層の集まりとなり、ついには自己を見失う。

問三 傍線部3「内省力のある患者の場合」とあるが、筆者はこのような「場合」についてどのように考えているか。次の中からもっとも適切なものをも一つ選べ。

a 「時間の流れ」とはどのようなものであるのかを教えてくれる貴重なケースであり、物理学や心理学及び哲学を越えた学問的成果をもたらすことがおおいに見込まれる。

b 自己の内面への洞察から、時間意識をも捉え、その結果自己の喪失まで見いだす特異な状態が、更に新たな時間を発見するに至る、優れた内省力を示している。

c 「自分」と、存在の「実感」とを、「時間の流れ」に結びつけ、「人間のこころ」というものを露わにすることから、離人症の解明につながると期待している。

d 外的な事物への実感の喪失だけでなく、自己の内面や時間意識の実感の喪失にまで至っていることから、人間のこころを探る上で、本質的な問題を提示している。

問四 傍線部4「人間の知の対象」とあるが、筆者は「知の対象」についてどのように考えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 西洋古代以来、知の探究は事物の形相的部分に限定されていたが、それが現実の実感から離れた科学を生んだ以上、新たな知の次元も必要である。

b 西洋古代から追究してきた本質という対象は、もはや科学において限界に達した以上、科学ではない新たな知の次元とその対象が必要である。

c 現実から絶対に切り離せないものを西洋古代はその始めから忘却してきた以上、過去を反省して全く別の知の次元を開き、模索しなければならない。

d 「科学的思考」は眼や耳で捉えられる物體的な形の知の探究によって根本的な忘却をもたらしたから、未来に期待してむしろ新たな知の次元を目指さねばならない。

問五 傍線部5「形のない時間」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 西洋文明や科学に汚されていない地域でのみ生き続けている非科学的な時間。

b 科学的な思考を否定して、眼や耳では捉えられないものを大切にしようとする時間。

c 本質によってではなく、生きているという実感によって支えられている時間。

d 西洋文明と違って、エイドスをアイデアと見なさない文明で成立した時間。

問六 傍線部6(「ササ」と「ザマニ」)とあるが、筆者はこの二種をどのように考えているか。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 「ササ」は生者が関与する生きいきとした現在であるが、「ザマニ」は死者となった人が直ちに向かわねばならない無窮の過去である。

b 「ササ」は生きいきとした時間が流れる生者の領域であるのに対して、「ザマニ」は生者との関係を断つた恒久的な存在の領域である。

c 「ササ」は個人が生きている生の現実であるが、「ザマニ」は生きた個人が関与しても無意味となる永遠の領域である。

d 「ササ」は個人が関与しているという事実がもたらす生きた時間であるが、「ザマニ」は生者と断絶した時間の流れである。

問七 傍線部7「患者は生きながらにして現実への関与を停止しているのである」とあるが、どういうことか。その説明として、次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 患者は物理的な時間のうちに生命をもって生きていても、決して生きた時間を生きているわけではない。

b 患者は生命をもって生きていけると言えるが、しかし「ササ」には所在しない以上、生きているとは言えない。

c 患者は、科学という本質を追究する時間の中に居るからこそ、科学と同様に現実の関与から離れ去っている。

d 患者は、「ササ」から隔絶され、「ザマニ」という科学の時間の中で生かされているにすぎない状態にある。

問八 傍線部8「見物人として立ち会っている」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 実際は、宇宙の始源を見物することはできないが、客観的観察者として立ち会う想定はできる。
- b 時間は不可逆なものであると思われがちであるが、実は可逆性もあると考えねばならない。
- c 人間とは時間的な存在であり、どんな出来事にも自己の今の生を関わらせて生きるものである。
- d 科学の一つである物理学は、時間の不可逆性を説明したが、自らが始源に立ち会うという矛盾をおかしている。

問九 傍線部9「時間の死」を、だれが想像することができるだろうかとあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 時間とは過去と未来への関わりと共に存在するのであって、その限りですべての時間の中の出来事に関与できる。
- b 科学は時間を物体的に考えるが、このような現実から遊離した生き方こそ時間の死というべき事態である。
- c この世の終わりが来て、人間が一切消滅してしまっても生き残る人間は存在するから、時間はむしろ不死である。
- d 人間のこころとは時間の流れそのものであるから、人間が現実に関わりつつ生きる以上は、時間は生き続ける。

問十 本文の内容と一致しているものはどれか。次の中から二つ選べ。

- a 形のあるものは、人間にとって、事物の理解や文明をもたらした意義があるが、しかし本当に大切なものとは形のないものである生きいきとした現在の時間である。
- b 人間とは、今と今とをつなぐ流れる時間を生きる存在であるから、それを忘却させた科学を反省し必ずや乗り越えて、自己を取りもどすことができる。
- c 人間は、科学や文明という点で進歩を遂げたが、それらは逆に人間を「ザマニ」に追いやっており、「ササ」を取りもどすべく時間のあらゆる場に立ち会わねばならない。
- d 人間は、離人症患者のように、科学のおかげで自己を見失いがちであるから、文明に汚されていない地域を見習って、生きた時間を再興して行く必要がある。
- e 人間にとって、離人症患者の症状は、科学や時間の本質を捉えるための大きな手がかりとなるから、新しい知の次元と生きた時間を目指して患者に対処して行く必要がある。
- f 人間は、「まだない」と「もうない」をつなぐ生きた現在を生きており、いわば「ササ」におけるような様々な事物に関与する生を生きている。

二

次の文章は、元文五年（一七四〇）、作者が四十四歳の時に、江戸から故郷の浜松に帰省した際の紀行文である。これを読んで、後の問に答えよ。

夕づけて箱根山にかかる。関までは苦しとて畑といふ所に宿る。いとはや夜寒なれば、寝もいらぬに、滝の音鹿の声うち籠¹めたる山の秋風聞きあかされて立ち出でぬ。ほのほのと明けゆく山の峽よりかへり見れば、朝霧白く立ち渡れるは海を見ん心地す。関越ゆるほど日さし昇りて、湖の面のどかに見渡さる。彼方此方山を巡れる水の面は、三巴といふや似つらん。蚕叢²に擬したる人は誰ばかりなるや。その後いくそばくの人か望み見けむ。この湖にさせる聞えなきぞあやなき。

延暦十一年に富士の山焼けて、石など飛び散りければ、足柄の道塞がれりとして、初めてこの道は開かる。されどもまたの年もとの足柄に返されける事は書に見ゆるを、後またこなたを越ゆることになれるは、いつばかりよりならん。貞観六年七年にも焼けて、甲斐駿河の地など埋れしことあれば、その頃よりの事なるべし。

富士の煙の絶えしは、延暦の頃よりたびたび焼けし故なるべし。およそ高き山には、水あり火ありて相打つ故に、鳴沢もありけんを、火終に大に起こりて、岩を飛ばし土を散らし、水を蓄ふる勢ひなければなるべし。山は火あるのみにては煙立たざるか。宝永のころも焼けにけれど、その前つ方に煙立ちしことを聞かず。水の火あるいはほに触れて立てる息なるべし。何某の岳もしかなりといへり。「今は立たず」といへるを思ひ合はすれば、貞観の時に絶えたるにやあらん。

今日は何某の国より貢物贈るとて、さりあへぬまで行きかひたり。「荷前の箱の荷の緒にも」など誦して下るに、ふりさけ見らるる海山の興あるにも、過ぎしころ雨に越えし折思ひ出でらる。「すべて深山は雨ばかりあはれなるはなし。ここかしこ燻り出づる雲の薄き濃きに、山々は面影ばかりぞ見ゆる。『人面より起る』と吟じて越えつる、苦しからぬにしもあらねど、あなをかしとみしは」といふに、人々は「例のひが心にこそ。いふせかるべき物好みなめり。龍に乗るらん山人にや誂へまし」など笑ふ。

からうじて三島の駅に至る。古き歌に「ちちの実の父」と続けしは、木の実にてこの国にありといふ人のありしかば、問ひ求

むれど見知れる人もなし。

7 古郷のははその影は問ひゆけどちちのみなきぞ悲しかりける

今日は雲迷ひて富士も見えず。原の宿わたりより雨降らんとす。富士川は明日こそ渡るべきを、水嵩8や増さりなむ。夜をか
けてだに蒲原かんばらの宿までいかで行かんとて、夕つ方より立ちまよふ雲の脚とともに急ぎつつ行くに、空晴れて思はざるに月さや
かに出でにけり。

夜舟こぐ富士の川門かほとに霧晴れて高嶺たかねに出づる月を見るかな

9 「夕の雲の誘はざらましかば、かかる所の月は見ざらましを、心ありけり」など言ひ合へり。

(賀茂真淵『岡部日記』)

〈注〉 ○関―箱根の関所。○畑といふ所―箱根と小田原の間にあつた宿場。後出の「三島の駅」「原の宿」「蒲原の宿」もすべて東

海道の宿場。○湖―芦ノ湖。○三巴―中国後漢時代、いまの四川省にあつた巴郡・巴東郡・巴西郡の総称。○蚕叢―

「蚕叢」は李白の詩に出る語。けわしい山道をいう。箱根路にこの語を用いたのは林羅山。○延暦十一年―延暦二十一年

(八〇二)が正しい。この頃大きな噴火があつた。○貞観六年―八六四年。○鳴沢―音高く流れる溪流。○宝永のころ―

宝永四年(一七〇七)に富士山の大噴火があつた。○今は立たず―『古今和歌集』(九〇五年)の仮名序に「今はふじの山も

煙たたずなり」とある。○荷前の箱の荷の緒にも―『万葉集』卷二に出る和歌。「東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は心に乗

りにけるかも」○人面より起る―李白の詩「友人の蜀に入るを送る」に出る。「山は人面より起り、雲は馬頭に傍そひて

生ず」。山道の険しいことを述べたもの。○ちちの実の父―『万葉集』卷十九に「ちちの実の 父の命 ははそ葉の 母の

命 おほろかに 心尽して」とある。「ちちの実の」「ははそ葉の」はそれぞれ父・母にかかる枕詞。

問一 傍線部1「滝の音鹿の声うち籠めたる山の秋風聞きあかされて立ち出でぬ」の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 滝の音や鹿の声のまじった秋風の音のために眠れないまま朝出発した。
- b 滝の音や鹿の声のなから聞えてくる秋風の音を明け方まで聞いてから出かけた。
- c 滝の音や鹿の声がこもって聞える山からの秋風にせかされるようにして宿を出た。
- d 滝の音や鹿の声のなから聞えてくる秋風の音によく耳を傾けてから出発した。

問二 傍線部2「この湖にさせる聞えなきぞあやなき」の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a この湖にこれといった歌がないのは、面白みに欠けることだ。
- b この湖のことがあまり評判にならないのは納得がいかなることだ。
- c この湖を見に来る人が少ないのは筋の通らないことだ。
- d この湖の話为谁も聞いたことがないというのはよく理由がわからないことだ。

問三 傍線部3「山は火あるのみにては煙立たざるか」の理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 火山は、爆発すると、岩や土を飛ばしてしまうから。
- b 何度も噴火すると、火山の形が変わってしまうから。
- c 火山の煙は、火山に含まれる水分と熱によるから。
- d 煙を出さずに突然爆発するタイプの火山もあるから。

問四 傍線部4「さりあへぬまで行きかひたり」の現代語訳として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 避けることができないくらいに、多くの人が行き違った。
- b やむをえず、行ったり来たりした。
- c ことわりきれないくらいに、往来には人がいた。
- d さりげなく、たがいに道をゆずりあっていた。

問五 傍線部5「いぶせかるべき物好みなめり」の現代語訳として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a うつとうしいことが好きな方です。
- b むさくるしいことが好きな方です。
- c かわったことが好きな方です。
- d あぶなっかしいことが好きな方です。

問六 傍線部6「龍に乗らん山人にや詔へまし」など笑ふについて、

(1) この箇所現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「龍に乗るとかい仙人にお願ひしてみましようか」と言つて笑つた。
- b 「龍に乗るとかい仙人に作らせることにしましよう」と言つて笑つた。
- c 「龍に乗るとかい仙人を呼んだ方がましでしょう」と言つて笑つた。
- d 「龍に乗るとかい仙人にお願ひした方がよかつたのに」と言つて笑つた。

(2) 人々はなぜ笑つたのか。その説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 雨が降つて大変な道中なのに、山奥の雨の景色はすばらしいといつて、古歌や漢詩の蘊蓄うんちやくばかり披露していたから。
- b けわしい山道で、本当はつらい思ひをしているのに、無理に楽しそうに振舞つているのを見破られたから。
- c 人々は、けわしい山道を越えるために大変な思ひをしているのに、作者だけが、楽しそうに話していたので。
- d 以前に越えたときよりも景色がいいことを強調して、風情があるとしきりに語つたので。

問七 傍線部7の和歌の解説として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 故郷の母は存命なのに父がもう亡くなつていないという寂しさを「ちちの実」の故実探索にことよせて述べている。
- b 「ちちの実」という植物は実在しないのに、あるといった古人のことをうらめしく思つている。
- c 故郷にいる父母のことを思い、これから会いに行くのを楽しみにしている。
- d 「ははそ」という植物は存在するのに、「ちちの実」という植物の存在を確認できなかったことを残念がつている。

問八 傍線部8の現代語訳として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 今夜、富士川の水かさが増えている。そうすれば夜のうちに蒲原までなんとか行けるだろう。
- b 明日、富士川の水かさは増えているにちがいない。夜蒲原まで行き着けるかどうかわからない。
- c 今夜、富士川の水かさは増えるはずだ。せめて夜には蒲原のあたりまで行っておきたい。
- d 明日、富士川の水かさは増えているにちがいない。徹夜してでも蒲原まではたどり着きたい。

問九 傍線部9の現代語訳として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 夕べの雲に誘われるようなことがあれば、こういうきれいな月をみることもあっただろうに。
- b 夕べの雲に誘われなくても、こういうきれいな月はせひともみておかなければならない。
- c 夕べの雲に誘われなかったので、夜、雨が降らず、こういうきれいな月をみる事ができたのだ。
- d 夕べの雲が誘ってくれなかったら、こういうきれいな月をみることはなかっただろうに。

問十 「足柄の道」と「箱根山の道」について、本文で述べるところに合致しないものを次の中から一つ選べ。

- a 箱根山の道は、延暦年間にはじめて開かれた。
- b 足柄の道が復旧したとき、箱根山の道は閉鎖された。
- c 史書に箱根山の道の名は記されていない。
- d 貞観の噴火で、足柄の道は不通になったと思われる。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

「知章騎馬似乗船、眼花落井水底眠、言下醉墜井中、就便安眠也。

蓋井幸寛広者、頼水浅得^レ不^レ溺、井底坐水以睡。故曰「水底

眠」。不以辞害意可也。京師森維良、豪飲無量。以篆刻遊四方。

嘗在讚之丸龜夜醉、帰墜橋岸有古松。臨水横出、繚枝輪

平如展^レ簞。頼為其所承、就便熟睡。及旦、人見大驚、喚醒而

救之。微松、幾飼魚鰲矣。故余贈維良詩、有「半宵松上眠」之句。

此亦不知其樹之状、則謂松上安可臥耶。如曲阜勝果寺大井、

円径六十丈、見三元人楊奐「東游記」。措大眼孔不宏。所謂蟹螯擬

甲營穴。以為凡井皆僅容身。故異議紛紜。真井蛙之見矣。

(津阪東陽「夜航詩話」)

〔注〕○「知章騎馬……」杜甫「飲中八仙歌」の第一、二句。「知章」は盛唐の詩人・書家として有名な賀知章。○讚之丸龜―讚岐国丸龜。現在の香川県丸龜市。○繚枝糺輪―枝がもつれ合うように伸び、円形をなしている状態。○簞―竹で編んだむしろ。○曲阜―現在の中国山東省にある地名。○六十丈―約百八十メートル。○措大―書生、学者。

問一 傍線部1「似乗船」、2「眼花」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つずつ選べ。

- 1 a ゆつたりとくつろいでいるさまが船に乗っているようだ。
- b 酔ってゆらゆら揺れているさまが船に乗っているようだ。
- c 馬を操り速やかに走り去るさまが船に乗っているようだ。
- d 俗を離れ風流な旅を楽しむさまが船に乗っているようだ。

2 a 眼が充血していること。

- b 花の美しさに眼を奪われること。
- c 眼がちらちらすること。
- d 目元が花のように美しいこと。

問二 傍線部3「頼」の読みとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a たのみて
- b たちまちに
- c さいはひに
- d たまたま

問三 傍線部4「以辞害意」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 字面の意味にとらわれて、本来の意味を理解しそこなうこと。
- b 不穏当な言葉遣いのために、相手の感情を害してしまうこと。
- c 根拠のはつきりしない説を主張して、人々の心を惑わすこと。
- d 恣意的な解釈をすることで、語の意味をわざとゆがめること。

問四 傍線部5「為其所承」について

(一) その書き下し文として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 為に其の所を承く。
- b 為す所を其れ承く。
- c 其の承くる所たり。
- d 其の承くる所と為る。

(二) 「其」が指すものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 人
- b 簞
- c 維良
- d 古松

問五 傍線部6「微松」を別の表現で言い換えた場合、同じ意味となるものはどれか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 若無松
- b 雖無松
- c 因無松
- d 寧無松

問六 傍線部7「曲阜勝果寺大井」のことを、筆者がここで持ち出したのはなぜか。その理由として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 中国の書物に見える円形をした巨大な井戸の例を挙げることで、直前に出てくる讃岐丸亀の古松の大きさを強調するため。
- b 冒頭で論じた杜甫詩の解釈について、筆者が考えるような大きな井戸が実際に存在し得ることを示し、その傍証とするため。
- c 一般には余り知られていない中国の井戸の例を挙げることで、世間の無学な学者に対して、自らの博覧強記ぶりを誇示するため。
- d 常識では考えられないほど巨大な井戸の存在を示し、中国には日本人の想像を越えるような事物があることを主張するため。

問七 傍線部「蟹螯擬甲営穴」の本文における意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 蟹が自分の甲羅の大きさに合わせて巣穴を掘るように、人間は自分の身の程をわきまえて、分相応の生き方をするべきだ。

b 蟹が自分の巣穴にすっぽり収まってなかなか出てこないように、度量の狭い人間は、自分だけの世界に閉じこもって独善的になる。

c 蟹が掘る巣穴の大きさが甲羅の大きさに見合っているように、学識の乏しい人間は、物事の真意や真理を理解する力も低くなる。

d 蟹が危険を感じるとすぐ巣穴にその身を隠すように、人間は常に危機に備え、いつでも身を守る準備をしておかねばならない。



